令和６年度　国立中央青少年交流の家

全国高校生体験活動顕彰制度（ちいぷろ！）
富士のさと　高校生地域探究プログラム
「オリエンテーション合宿」【Take the first step】

令和６年７月 13 日（土）・14 日（日）・15 日（月・祝）　２（０）泊３日

〇趣旨

探究的な学習に主体的に取り組む姿勢および自ら課題を発見し、その課題を解決する力を身に付けさせる。また、多様な人々と協働しながら地域・社会にある課題解決に向けた取組を行うことで、郷土や自然に愛着を持ち、新たな価値を創造する人材を育成する。

〇参加者

高校生　29 名（宿泊 19 名、日帰り 10 名）

〇事業の内容　11 科目 22 単位時間

（１）ガイダンス

国立中央青少年交流の家 企画指導専門職　間瀬　哲章

アイスブレイクによって仲間づくりを行った後、全国高校生体験活動顕彰制度とオリエンテーション合宿の説明を受けるとともに、探究的な学びを進めていく上での心構えを学んだ。

（２）講話「地域づくりの実践」

静岡県立御殿場南高等学校　後藤　祐貴　さん

昨年度の地域探究プログラム全国ステージにおいて、理事長賞を受賞した高校生の取組を聴くことにより、よりよい地域づくりを実践していくための意欲を高めた。

（３）フィールドワーク①「地域の魅力を発見」

・株式会社時之栖　阿山　恭弘 氏（観光）
・有限会社荒井友吉商店　荒井 仁 氏（茶業）
・株式会社渡辺商店　渡辺　義基　氏（精肉）
・ＮＰＯ法人みらい建設部　宮坂 里司 氏（放置竹林）

地域づくりに関する取組についての活動を体験し、その魅力を発見するとともに、地域が抱えている課題について考察した。

（４）講義・演習①「地域理解」
講義・演習②「課題解決の基礎」

国立中央青少年交流の家 企画指導専門職　間瀬　哲章

講義・演習①では、グループ協議においてフィールドワーク①で得た個の気づきや発見を共有するとともに、フィールドワーク先の活動目的を考えることで、地域理解をより深めた。
講義・演習②では、フィールドワーク①において一人一人が感じた地域の魅力や課題について、自らのアイディアによる仮説（解決策）を立て、グループ全員で共有した。また、フィールドワーク②に向けて、仮説を検証するための質問や取組をグループで検討し、まとめた。

（５）フィールドワーク②「地域課題の探究」

・株式会社時之栖　阿山　恭弘 氏（観光）　・有限会社荒井友吉商店　荒井 仁 氏（茶業）
・株式会社渡辺商店　渡辺　義基　氏（精肉）
・ＮＰＯ法人みらい建設部　宮坂 里司 氏（放置竹林）

講義・演習②で立てた一人一人の仮説をグループで検証するため、講師へのインタビューや質疑応答等を行い、疑問点を確認したり、より有効な活動（解決策）を探ったりした。

（６）講義・演習③
発表①〔グループ発表〕
国立中央青少年交流の家 企画指導専門職　間瀬　哲章

講義・演習③では、フィールドワーク②での検証を踏まえ、互いの良さを活かしながら多面的・多角的に考察し、グループとして１番良いと思う解決策を思索した。
発表①では、講義・演習③の成果として、より有効な活動（解決策）とその根拠についてグループ発表を行った。その際、伝えたいことや構成を明確にするなどのプレゼンテーションの基礎についても学んだ。

（７）講義・演習④「行動計画の基礎」
発表②〔個人発表〕
国立中央青少年交流の家 企画指導専門職　間瀬　哲章

講義・演習④では、オリエンテーション合宿にて学んだことを踏まえ、一人一人が地元地域で探究活動を実施するための行動計画を作成した。
発表②では、個人発表（振り返りや今後の実践活動の展望）を行い、全体で共有した。

（８）実践活動のためのガイダンス
国立中央青少年交流の家 企画指導専門職　間瀬　哲章

実践活動を実施する上での安全管理や社会のルール・マナーを理解するとともに、実践活動や地域探究アワードなど今後の日程や手順について確認をした。

《事後アンケートより》

【『事業全般』に関する満足度】　4 段階評価で 3 以上 100%（4 が約 90%）
・実際に全国ステージ入賞者のプレゼンが聴けて参考になった。
・現場に行って、体験活動を通して現状の問題を把握できてよかった。
・１日目の内容を活かしてブラッシュアップしていくということは難しかったが、達成感を得られた。
・仲間と協力すること、自分で課題を見つけてその改善方法を周りに発信するなど、社会人になってからも活用できる力が養われ、とても充実しました。
・探究のプロセスの再確認や計画の立て方を詳しく学べてよかった。
・とにかく全ての活動が楽しいと思えました。
【「ぜひまた『探究』してみたい」と思えた】　4 段階評価で 3 以上 100%
・自分の好きなことを深く探究することは楽しいことだと思えた。
・探究の手順が分かったので、探究の苦手意識が無くなった。
・探究を実際行ってみて、考えれば考えるほどアイデアが浮かんできてとても楽しかった。
・難しく考える必要がないことや、「できる」「できない」ではないことが分かった。
・今回の活動を通して、探究することが楽しいと感じ、またこのような体験をしてみたいと思いました。
・深いところまで考え、実行に移すことがとても新鮮な経験で、特別なものに感じた。

《成果と課題》

○参加者により近い立場の方（昨年度の参加者で全国ステージにおいて理事長賞を受賞の高校生）を講師にし、また講義後は参加者として受け入れたことで、参加者には探究活動をより身近に感じさせることができたとともに、その後の活動にも良い影響を与えることができた。
○8 校から 29 名、また県外の高校からも参加があり、講義・演習においては様々な意見交換がなされた。参加者は、同世代の仲間から刺激を受けるとともに、深い学びに繋げることができた。
○今年度は、宿泊者同士の交流会（体育館でのスポーツ）を企画した。宿泊者全員が参加し、積極的に交流することができ、二日目の夜は自分たちから交流会を行うなど、よりコミュニケーションを図ることができた。このような取組がより良いグループワークにも繋がったと思われる。
●「活動内容の主語を自分にする」ということをより明確に伝えることで、最終日の発表内容の質を向上させることができると感じたため、来年度に活かしていきたい。